

脚部への美意識とその変容における靴下のデザイン変化
—18・19 世紀初頭の西洋における男性用靴下に対する美意識と
現代日本の若年層女性の靴下に対する美意識の比較—

Changes on the design of stockings and socks in the sense of beauty of the day and its transition – Comparison between the Western European men in 18th and early 19th century and young girls in today's Japan

香川 幸子*¹⁺, 鈴木 直恵*¹⁺, 瀧本 雅志*²⁺, 鴫田 章*³⁺, 野末 和志*⁴⁺, 五十嵐 光二*
Sachiko Kagawa*¹⁺, Naoe Suzuki*¹⁺, Masashi Takimoto*²⁺, Akira Tokita*³⁺, Kazuyuki Nozue*⁴⁺,
and Koji Igarashi*⁺

*1 文化女子大学服装学部 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Faculty of Fashion Science, Bunka Women's University

3-22-1 Yoyogi, Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 岡山県立大学デザイン学部

Faculty of Design, Okayama Prefectural University,

*3 エークロッシング

A-CROSSING Co., Ltd,

*4 (有) 企画屋えぬ

KIKAKUYA -ENU Ltd.

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : This research focuses on the excessive fashion awareness of the legs and aims to identify the reason stockings and socks have an important position in fashion by comparing the transition in the design, aesthetic consciousness and fashion sense during different periods. In the current fiscal year, the data from museums in France were collected to create a database by analyzing color and design, decoration, materials, and other factors.

目的

ファッション史で脚がセンセーショナルに脚光を浴びるのは、1960年代のミニスカートである。しかしすでに西洋中世期から男性ファッションで上着の短縮化がみられ、その頃からズボンが登場する19世紀初頭までの間に、脚部の美を強調するファッションとして靴下は重要な役割を果たしていた。当時の靴下には全身のファッションと連動した華麗で自由奔放なデザインが創作され、脚への過剰ともいえるファッション意識がみられたが、近現代ファッションの対象が女性中心に移行するにつれ、それは殆ど顧みられこと

*1) kagawa@bunka.ac.jp

がなくなった。しかし、脚部のファッションというテーマに沿って考えるならば、その時代の男性の脚は大きなファッション史上の問題とならざるを得ない。

一方、現在の日本の若年層の女性、とりわけ女子高校生に代表される脚のファッションは、脚部の露出度が高く、その結果、靴下は彼らのファッション感覚のうえで大きな位置を占めている。この現象は他の国には見られない独特なファッションスタイルと言える。

本研究は、脚の露出というファッションスタイルに含まれる脚への過剰ともいえるファッション意識に着目し、靴下に求められるデザイン性および靴下がファッションにおいて重要な位置を占める理由を、靴下のデザイン、美意識や時代意識の変遷の比較を通して明らかにすることを目的とする。

本年度の活動

本年度はフランスの美術館が所蔵する靴下の現物資料や図像資料から情報を収集し、靴下の色柄、装飾、素材等の分析を行いデータベースの制作を試みた。該当の靴下を所蔵するパリ‘Les Arts Decoratifs’ ‘Musées Galliera’、トロワ‘Musées d'Art et d'Histoire’、ロンドン‘Victoria & Albert Museum’から所蔵品の調査許可が得られたが、本年度は‘Les Arts Decoratifs’ ‘Musées d'Art et d'Histoire’の2美術館で調査を実施した。

‘Les Arts Decoratifs’は靴下を2008点所蔵しており、そのうち82%がデータ化されていた。17世紀以前の靴下はなく、また、18世紀も女性用4点と非常に少ない。他方、19世紀の靴下は528点所蔵しているが、男性用は19世紀後半に製造されたバゲット柄による黒の絹靴下1点だけであり、それには赤い絹糸で刺繍が施されていた。現物調査はできなかったが、館内資料室で閲覧できるデータベースから18世紀～20世紀の靴下を半世紀毎に分類し、時代別の情報を収集した。

一方、‘Musées d'Art et d'Histoire’の所蔵する靴下はすべて19世紀以降のものであった。美術館には現物が展示されているが、収蔵庫にある靴下23点の写真撮影が許可されたため、それらについて調査を実施した。トロワは18世紀後半にはすでにフランスの代表的なニット産業地としての地位を確立し、今日に至っている。所蔵品には見本市等へ出展した際の製品・技術の高度さを示す展示用が含まれるため、実際に人々が身につける靴下とは異なる位置にモチーフが配置されている靴下もみられた。

靴下を男性ファッションのポイントとする服装は16世紀から19世紀初頭に至るまで続いたが、この期はウィリアム・リーによって発明された1589年の足踏み靴下編み機を始めとする靴下編み機が著しく発達した時代でもあった。18世紀末に長ズボンが登場すると男性用靴下は次第にシンプルなものになったが、靴下は衰退の途を辿らず、今度は女性のファッションにおいて開花していった。王政復古頃に女性のドレス丈が短くなり踝が見えるようになると、繊細な装飾が脚部へ集中した。19世紀の女性用靴下のモチーフは花模様が多かったが、ベルエポックの時代には格子や縞柄、黒いレースを組み合わせた靴下も好まれ、刺繍、カットワーク、スパンコールなど、鍛錬を積んだフランスの職人技による繊細で華麗な手工芸の装飾が廃れることなく機械編みと共存して自由なデザインを生み出していた。

今後の展開

現今の若年女性のファッションにおける靴下のもつ役割および着用意識を明らかにするために、日本とパリの若年層にアンケート調査及び観察調査を実施する。また、若年女性の美意識を反映させた靴下のデザインを展開し試作を行う。